

# 「自宅」で最期 9・8%

県民の死亡場所  
12年厚労省調査

## 20年前から半減

2012年、「自宅」で最期を迎えた県民は1202人で、同年亡くなった県民全体の9・8%だった。ところが厚生労働省の人口動態調査で分かった。死亡者の87・8%に当たる1万72

8人は、病院、老人ホームなど自宅以外の「施設」で亡くなった。20年前は、21・4%が自宅で最期を迎えていたが、終末期の医療、介護が病院や介護施設を中心に行われるようになり、

自宅で亡くなる人が減ったとみられる。

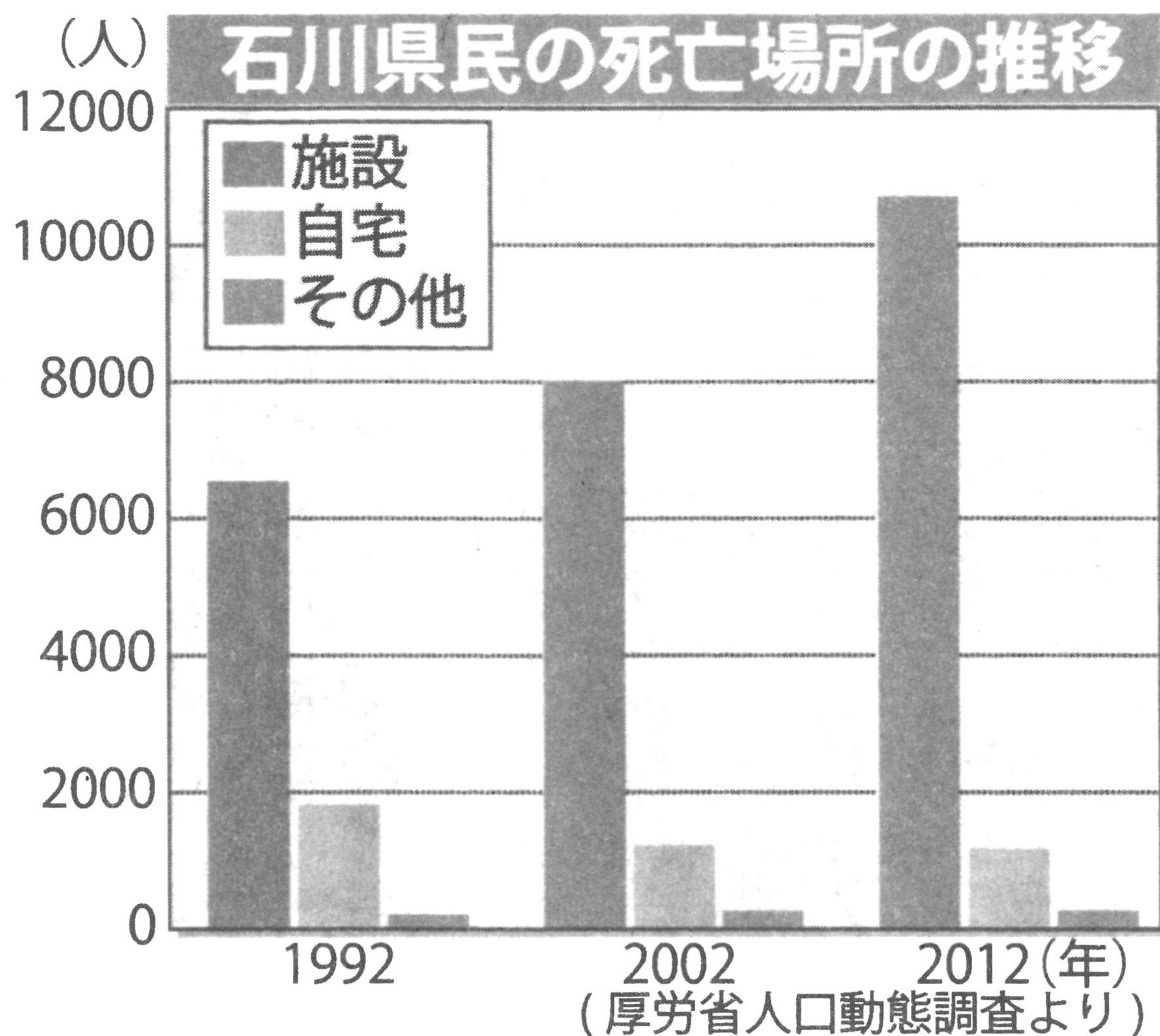
厚労省の調査によると、12年に県内では1万2223人が亡くなった。死亡先で最も多いのは、病院の9529人(78・0%)。老人

ホームは667人(5・5%)、介護老人保健施設は382人(3・1%)、診療所は150人(1・2%)だった。自宅で息を引き取った人数の1202人は病院の次に多いが、10人に1人もいない計算になる。その20年前の92年の調査では、県内の死亡者は8641人で、そのうち自宅で最期を迎えた人は21・4%の1850人いた。自宅以外の施設で死を迎えた県民

は76・0%の6564人だった。

県立看護大の浅見洋教授らが白山麓で行った「終末期療養を望む場所」の意識調査では、「病院」が48・5%と多いものの、「自宅」も34・1%に上った。12年度の厚労省「終末期医療に関する意識調査」でも約60%が自宅療養を希望した。

県は在宅医療と介護の連携を支援していく方針で、「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最期まで続けられるよう、25年をめぐりに地域の包括的な支援・サービス提供体制を構築する」(長寿社会課)としている。



外の施設で死を迎えた県民